

『協力と抵抗の内面史』

2019年07月06日

戦時中、教会・キリスト者たちは時局とどのように向き合ってきたかは、興味深い主題である。この問題について、日本基督教団宣教研究所教団史資料編纂室が編纂した『日本基督教団史資料集（全5巻）』は、教団、教区、教会に残された資料をまとめ、解説している。動かし得ない資料であるから、教会・キリスト者たちの言動が浮き彫りにされる。

日本基督教団は1941年に30教派のプロテスタント諸教会が合同して成立した。この合同に関し、1967年に出された「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白（以下一戦責告白）」では、下記のように告白している。「わたくしどもはこの教団の成立と存続において、わたくしどもの弱さとあやまちににもかかわらず働かれる、歴史の主なる神の摂理を覚え、深い感謝とともにおそれと責任を痛感するものであります。」教団成立は、政府の戦争遂行に際し、教会を円滑に統制するために、国策として要請されて合同したものである。教会合同は歴史や教理が違う教派の合同であるから、長い議論を経て、合同するものであるが、急遽合同したため、教団は教会としての体制、機能を十分に整備することはできていなかった。「信仰告白」は制定されず、「教団規則」において、「教義の大要」を整え、第7条に「生活綱領」を下記のように定めている。「一 皇国ノ道ニ従ヒテ信仰ニ徹シ各其ノ分ヲ尽シテ皇運ヲ扶翼シ奉ルベシ 二 誠実ニ教義ヲ奉ジ主日ヲ守リ公礼拝ニ与リ聖餐ニ倍シ教会ニ対スル義務ニ服スベシ」教団は、信徒の生活綱領を、教義や主日礼拝を守ることであり、皇国の道、皇運を扶翼することを優先させていたのである。教団が時局に迎合していったことは容易に想像できる。『日本基督教団資料集』は、戦争に協力していった諸々の実態を伝えている。

そして、敗戦を迎えた最初の常議員会で下記のような議論が行われている。「谷口（茂寿）氏ヨリ、教団統理者並ニ役職員ハ此ノ際戦争責任ヲ如何ニ考フルヤトノ質問アリ。統理者（富田満氏）ハ、余ハ特ニ戦争責任者ナリトハ思ハズ、サレド責任ヲ感ジテ辞職スベキ者ナリトセバ今辞職スルハ軽キ事ナリ。タゞ重要責務山積セル今日直ニ辞職スルハ反ツテ無責任ナリ。辞職ニハ時期アレバ、ソノ時期ヲ待チ居ル次第ナリト答フ。」

敗戦後22年経って、教団は時の総会議長鈴木正久氏の名で「戦責告白」を公表した。公表した時、大きな反対の声があった。それは、戦時中、教会・キリスト者たちは宣教に励んだが、それらの全てが否定されると受け取り、反対したのである。家永三郎氏は『戦争責任』の中で、宗教者でも戦争責任を認めることに抵抗があるのかと批判的に書いている。教団が「戦責告白」を出してから、各教派・諸団体から続々と「戦争責任告白」が出された。その中で、明治学院の「明治学院の戦争責任・戦後責任の告白」は、明治学院の理事長であった富田満牧師の名を上げて、下記のように告白している。「教団『統理』富田満牧師は自らも伊勢神宮を参拝したり、朝鮮のキリスト者を平壤神社に参拝させたりしましたが、このことが朝鮮の多数のキリスト者を殉教に追いやり、戦後も日朝両キリスト者の間にうめがたい深淵を作ってしまったことは否定すべくもありません。朝鮮・台湾ではこの神社参拝問題のために多くのミッションスクールは存廃の岐路に立たされたのです。」

日本の教会は大方、モーセの十戒の第一戒「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」の戒めに矛盾しないと、神社参拝、天皇崇拝を受け入れていったのである。一方、ホーリネス系の教会は再臨信仰が「国体を否定」するものとして、治安維持法違反の容疑で訊問され、認可取消処分、結社禁止処分を受けた。270を超える教会が解散

させられ、牧師には自発的辞任が強要された。71名が起訴され、14名が実刑を受け、厳しい取り調べと劣悪な環境による衰弱や病気で、7名の牧師が刑務所内や保釈直後に死亡している。その葬儀には、官憲を恐れて、列席者はほとんどいなかったという報告もある。

今年の6月1日に、富坂キリスト教センターが編集した『戦時下を生きたキリスト者たちの研究 協力と抵抗の内面史』が出版された。戦時下を生きたキリスト者たちを「戦争協力者」と「抵抗者」に画一的な評価で二分に裁断できるものではない。キリスト者個人の内面に踏み込み、心の葛藤、相克、矛盾などを検証し、追従・加担・協力、そして、沈黙・拒否・抵抗の諸相を重層的に解明しようとしている。現在、秘密保護法、武器輸出三原則の撤廃、集団的自衛権を可能にした安保法制など、「新しい戦前」を迎えようとしている。また、中国、北朝鮮、韓国など、アジア諸国との対立と緊張が高まり、民族主義、排外的気分に覆われている。そのような時、戦争に邁進した時代のキリスト者たちの内面に分け入り、矛盾や葛藤を検証する必要があるのではないかという考えが根底にある。

検証されることは限られており、資料も少なく、もどかしいが、その試みは高く評価できる。戦時中、教団は日本が植民地化した樺太に13教会、台湾に36教会、朝鮮に56教会、満洲に15教会、中国に28教会、マニラやシンガポールなどの海洋各地に9教会を建てている。伝道熱心で、地域住民との関係も厚かったが、軍隊に保護されての宣教であるから、当然批判もある。朝鮮で神社参拝を強要した元憲兵の話を思い出す。激しい拷問を加え、神社参拝をさせたが、敢然と拒否する人がいて、信仰の固さに驚いた。そこで、聖書を読んでみたら、聖書は弟子たちがいかにだらしなく挫折したかを記していて、尚更驚いた。彼は、戦後洗礼を受け、キリスト者になったと証ししていた。本書で、戒能信生氏が、大連西広場教会の月報の中に、白井慶吉牧師のメッセージが残されており、解説していた。私は大連生まれで、父は教会に行ったことがあると話していたので、この教会ではないかと興味を惹かれた。白井牧師は戦争を正当化し、熱烈に戦意を高揚する説教をしていた。戦後、白井牧師は教団の総会議長を務めた。しかし、大連時代のことについての言及は全く見られない。「戦責告白」が出された後、教団内から反発や批判が出されたが、白井牧師の名前はそこにはない。徹底して沈黙を守ったのである。その沈黙は何を意味するのであろうか。明かされないままである。

ホーリネス教団旗の台教会の上中栄牧師が、戦時下迫害のターゲットにされたホーリネス教会のことを述べながら「罪責感について」書いている。戦後すぐに「一億総懺悔」が呼びかけられた。これは、日本のキリスト教の「戦争責任」観に大きな影響を与えた。しかし、「一億総懺悔」は、誰もが悪い、結果、誰も悪くない。誰にも責任がある、結果、誰も責任を取らないというマジック・ワードであった。上中牧師は、このことを「無信仰者性」と言い、罪を犯すことだけではなく、葛藤や気付きがないことであると言う。どんな罪をも犯してしまう人類の罪深さ、自分はその人類と連帯しており、その責任を負うべきことへの気付きがなければ、罪責は一般化の言葉になってしまう。罪への気付きがなければ宗教は楽観主義を支えるだけのものになり、人間理解は表層的になってしまう。私の「戦争責任問題」は先輩たちの歩みから、私の今後の平和への歩みを学ぶことであった。しかし、それだけではなく、私も先輩たちが犯した罪を根源的に持っている者であることに心底気付く連帯の中で、初めて、罪責を担う者としての歩みが可能になる。神の前で自らの「惨めさ」を認識し、葛藤することが責任的に関わることなのである。